

『サウル王の死』（Ⅰ歴代誌 10：1～14・Ⅰヨハネ 1：9）

【開会聖句】

Ⅰヨハネ

1:9 もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。

<序論>

・「Ⅰ歴代誌」からの二回目です。本書のヘブル語名は「日々の出来事」と言います。なにか、味もそっけもない名前ですが、だいたい旧約の書簡のヘブル語名は一番最初のことばからつけられることが多いのですが（「創世記」は「ベレシート（はじめに）」）、本書の最初のことばは「アダム」ですので、ちょっと違うみたいですね。そして、紀元前 3～1 世紀に「ギリシア語訳旧約聖書（七十人訳聖書）」ができた時には、その名前が「残された事柄」という名前に変わり、「列王記」の次に置かれるようになります。それは、本書が「サムエル」や「列王記」と同時代の歴史を扱っていながら、それらには含まれていない多くの事柄を記述しているからです。例えば、今朝の箇所にもその名前が出てくるダビデ王や息子ソロモン王の即位継承前後の暗い部分にはあまり触れないで、むしろ、二人がいかに熱心に神殿建設に努力したかが詳細に語られます。また、神殿における祭儀と、その執行者としての祭司が強調されています。こうしたところに本書の方向性を窺うことができるでしょう。ただし、それは本書がそういう人間的な意図によって書かれたということではなくて、あくまでも、そういう場にあって、神からそのような靈感を受けた筆者によって書かれた、ということだと思います。

<本論>

1. 残念な王サウル

今朝の箇所には、イスラエル最初の王となったサウル王の悲劇的な死が描かれています。彼がなぜ、そのような悲劇的な最期を迎えなければならなかったのかということについては、平行箇所の「Ⅰサムエル」などに詳しく記されていますが、それにしても、いつも思うのは、サウルというのは、一度は神の選びによって王とされたのに、その最期は、なんと不憫と言うか、哀れだなあということですね。聖書を読んでいると、他にもそんな人はたくさんいますが、先日、梅田のオアシスである本が目に留まりました。新刊書で「聖書のなかの残念な人たち」。この本は、東京にある上馬キリスト教会の信徒でツイッター部（？）の MARO さんという方が書いた本です。上馬キリスト教会は、以前からとてもユニークな本を何冊も出しています（「世界一ゆるい聖書

入門」等々)。その「聖書のなかの残念な人たち」という本のなかで今朝のサウル王のことも取り上げられていました。その見出しは「部下の出世を潰そうとする上司」。なるほど！と思ったのですが、何か、自分のサラリーマン時代にも似たような人がいたなあ・・・と。ただ、サウルも、もちろん最初からそんな人ではなかったんですね。彼がそのようになった原因は、やはり彼自身が犯した罪にありました。「Ⅰサムエル」13章を見ると、自分から離れて散って行こうとする兵たちの心をつなぎとめるため、自分は祭司でもないのに勝手に全焼のささげ物を献げるようなことをしたり、15章では、アマレクと戦って勝利したとき、神からすべてのものを聖絶しなさいと命じられたにもかかわらず、分捕り物のうち最も良い物を惜しみ、値打ちのない物だけを聖絶したりとか。今朝の10章13節後半から14節にも、『彼は主のことばを守らず、霊媒に伺いを立てることまでして、主に尋ねることをしなかった』とありますが、それも「Ⅰサムエル」28章に描かれています。ペリシテ人との戦いを前に、神から何も啓示がないことに恐れを抱いたサウルが、既に亡くなっていたサムエルの霊を霊媒（口寄せ）を使って呼び出し、伺いを立てるといふ。まるでホラー映画みたいな話ですが、そのような失敗の繰り返しがサウル王に今朝の死をもたらしたわけです。そして、そのサウルの後を継いだのが、あのダビデ王です。

2. 素晴らしい王ダビデ

それでは、ダビデ王の生涯はどうだったかという、彼は確かに、この後の聖書を読んでいくと、善王の基準とされるような素晴らしい王でした。また、それ以上に、後にはイエス様の祖先ともされた偉大な王でした。ただ、それでは、ダビデ王は、サウルのような失敗はしなかったか、罪は犯さなかったかという、決してそんなことはないんですね。ダビデも数々の恐ろしい罪を犯しています。ダビデというと、どうしても少年の頃のエピソードを思い浮かべる方も多いと思いますが、あのペリシテ人の大男ゴリヤテを石投げと石一つで打ち倒したという。「Ⅰサムエル」の17章に記されています。確かに、彼は偉大な王でしたが、それと同時に、私の印象は、「光あるところに影がある」というか、とても光と影のコントラストがはっきりした人物だったように思うんです。まあ、だから、あのような素晴らしい詩篇の数々を残せたのかもしれない。ダビデの詩篇を読んでいると、時々、ドキッとするような、「よく、こんなことまで言うよね？」と驚くようなえげつないことばが書き連ねられていますが、それらのことばも含めて、彼の人生というか、ダビデなんだなあと思うんです。なぜなら、特に彼の後半生は目を覆いたくなるようなことの連続でしたから。自分に忠誠を尽くす家来であったウリヤを騙し、卑怯な方法で抹殺して、その妻バテ・シェバを奪い取ったり、息子アブサロムの反乱に遭い、頭を覆い、泣きながら、本当に惨めな姿で都落ちしたとか。私は、ひねくれているのか、いつもダビデというと、その最晩年の姿が頭に浮かんでくるんです。「Ⅰ列王記」1章1節。

『ダビデ王は年を重ねて老人になっていた。そのため衣をいくら着せても温まらない

かった』(Ⅰ列王 1:1)。

この年老いたダビデの姿こそ、彼の晩年の苦悩というものを何よりも物語っているのではないのでしょうか。サウル王は、確かに、今朝の箇所にあったような悲劇的な死に方をしましたが、見方によっては、彼は、ダビデのように息子たちの裏切りに遭うこともなく、戦場で、文字通り、刀折れ、矢尽き、「もはや、これまで!」と全力を出し切って死んでいった、とも言えると思うんですね。聖書は、今朝の後半、10～12節で、サウル王の死にまつわる短いエピソードを残してくれています。それは「Ⅰサムエル」11章にある、かつてヤベシュ・ギルアデがアンモン人に攻められ、窮地に陥った時、サウル王によって救われたことにヤベシュの人たちが大きな恩義を感じていて、その恩返しをしたという話です。ですから、サウルの生涯もまた、ダビデの生涯と同じように、光もあれば影もあったのです。

<結論>

ただ、最後に一つだけ言えるとすれば、今朝の開会聖句。

『もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます』(Ⅰヨハ 1:9)。

今朝のテキストの最後の13～14節にも次のように書かれていました。

『このように、サウルは主の信頼を裏切った不信の罪のゆえに死んだ。彼は主のことは守らず、霊媒に伺いを立てることまでして、主に尋ねることをしなかった。そのため、主は彼を殺し、王位をエッサイの子ダビデに回された』(Ⅰ歴代 10:13～14)。

問題は、サウルが、主に尋ねることをしなかったということです。これは、「聖書のなかの残念な人たち」の代表とも言える、あのイスカリオテのユダも同じです。ユダとペテロや他の弟子たちとの違いも、今朝のサウル王とダビデ王の違いと似ているように思えます。それは、罪を犯すことが問題なのではなく、主に尋ねることをしなかったことが問題だということです。最後に、「ヨハネ」3章16、17節をお読みして、今朝のメッセージを閉じたいと思います。

『神は、実の、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである』(ヨハ 3:16～17)。